

京都の奥深い山に登ったときのことだ。舗装されていた道は、いつしか泥道となった。いくつもの隆起を越えたところに、一筋の小さな川があつた。その川は、削り取られた土砂のあいだを縫うようにして流れていた。川に沿ってさらに斜面を登っていくと、滝があつた。清冽な水が滝壺に落下している。

私は、ここに自然があると思った。ほとんど人の訪れることもないであろう、この山奥で、自然の営みが人間とは無関係に日々繰り返されているのだと。冷たい空気を全身に浴びながら、私はしばらくそこにたたずんでいた。立ち去ろうとして、ふと足元に目を転じたとき、そこには意外なものがあつた。滝壺から流れ出る川の兩岸一面に、人工的な補強がしてあるのだ。岩とよく似た色の人工物で、びっしりと川岸が覆われている。この自然に満ちた景観は、人工技術によって保全され、維持されていたのだ。

それを知ったときの、なんとも言えない不快感。人間が自然に對して行なってきたこと、そしてこれから行なうであろうことの本質を、一瞬にして見通したような気がした。これもまた無痛文明のひとつの形なのだ。

「自然」と「人為」は相容れないという考え方があがるが、これ

はまちがっている。まず、人間の介入によって維持されている自然というものがある。人間が設定した空間のなかでも、自然は息づくことができる。さらに、人間の技術が自然のはたらきを模倣するとき、その技術のただ中にわれわれは自然を感じ取ることができる。手入れが行き届き、四季の移り変わりに応じて景観を変える庭園の中に、われわれは自然を感じ取る。それらの光景は、人間のきめ細やかな管理によつてはじめて維持されているのに、背後の管理システムを知らないわれわれは、そこに自然の移ろいそのものを見るのである。

自然化するテクノロジー。テクノロジーが自然を模倣し、みずからを自然化させていくにつれて、われわれはそのテクノロジーを、より自然に受け容れていくようになるだろう。そしてわれわれは、世界の隅々に潜むテクノロジーの存在を感じ取る能力と経験を奪い取られ、美しく心地よい自然の光景に身もこころも慣らされ、すべてが自然に、何の問題もなく推移する世界を味わい尽くすことになるだろう。これこそが、無痛文明のもうひとつの形である。自然化するテクノロジーによつて、われわれの知性と感性が包囲され、なぜすべてが自然なのか、なぜすべてが自然に運んでいくのかについて疑いを入れる能力が徐々に損なわれていく。と同時に、自然のように見えているものが実はまったく自然

などではないのではないか、という「不安」もまた、われわれの
こころをむしばんでいくことになるだろう。そのような「不安」
を、無痛文明は、自然の心地よさと安楽さによって溶かしにこよ
うとする。

ここにあるのは、どのような戦いなのか。ここでは、「自然」
という観念こそが、われわれを圧迫してくるのか。自然であるこ
とが、われわれの生命の力を、背後から骨抜きにしてくるような
世界。自然であることを否定する試みのなかでこそ、われわれの
生命の力が活性化するような世界。無痛文明の行き着く先は、現
在のわれわれの想像力の域を超えている。自然の回復が世界中で
叫ばれている地球環境危機の時代。この時代の想像力を、突き抜
けよ。

（書籍版に続く・・・）